

病床での子規 その1

## 子規の随筆

## 随筆「墨汁一滴」と「病牀六尺」

33才のころから、子規の病気は悪くなり、ほとんど寝たきりになってしまいました。それでも子規はくじけず、「墨汁一滴」「病牀六尺」などの随筆を書き続けました。これらは、新聞「日本」に掲載されました。

ある日、編集長の古島一念が、病気のなかに必死で随筆を書く子規を心配して、「病牀六尺」の掲載を1回休みにしたことがありました。しかし、新聞に自分の随筆がのっていないことを知った子規は、一念に「僕の生命は病牀六尺にあるのです」「半分でも良いので教えてください」と手紙を出しました。一念は子規の真剣な気持ちを知り、毎日必ずのせることを約束しました。それから子規の随筆は、亡くなる2日前の明治35年9月17日まで、休まず掲載されました。

## 病気に負けなかった子規

子規は、病気のために苦しい毎日を送っていました。しかし、俳句や短歌を作ったり文章を書いたりすることをやめようとはしませんでした。子規にとって、その活動を続けることが、生きる力になっていたのです。

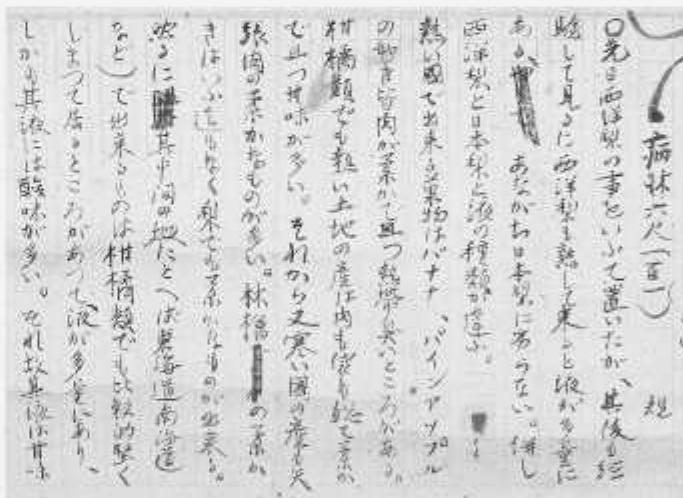


## 随筆ってなあに？

見たり聞いたりしたことや、その感想などを自由に書いた文章です。

子規は「墨汁一滴」や「病牀六尺」に、読んだ本のことや昔の思い出など、いろいろなことを書きました。

## チェック！ 「病牀六尺」をしてみよう



子規が書いた「病牀六尺」(明治35年8月21日)の原稿です。西洋と日本のくだものちがいを書いています。

梨、バナナ、  
ブドウ、リンゴ、柿、桃、  
パイナップル、林檎など、  
くだもの名前が  
たくさん出てくるよ。  
さがしてみよう。



## 日記「仰臥漫録」を書く

「<sup>まよがまんろく</sup>仰臥漫録」は、子規が34才から35才の時に書いた日記です。毎日のできごとや食べたもの、俳句、訪ねてきた人たちの名前や、自分の病気のことなどを書いています。

### 食いしん坊だった子規

右の写真は、子規が書いた「仰臥漫録」の一部（明治34年9月8日）です。この日食べたものを書いています。

朝と昼におかゆを3碗（3杯）食べています。間食には、栄養をつけるために牛乳を飲み、菓子パンを食べています。たくさん食べていますね。



展示室で  
チェック！

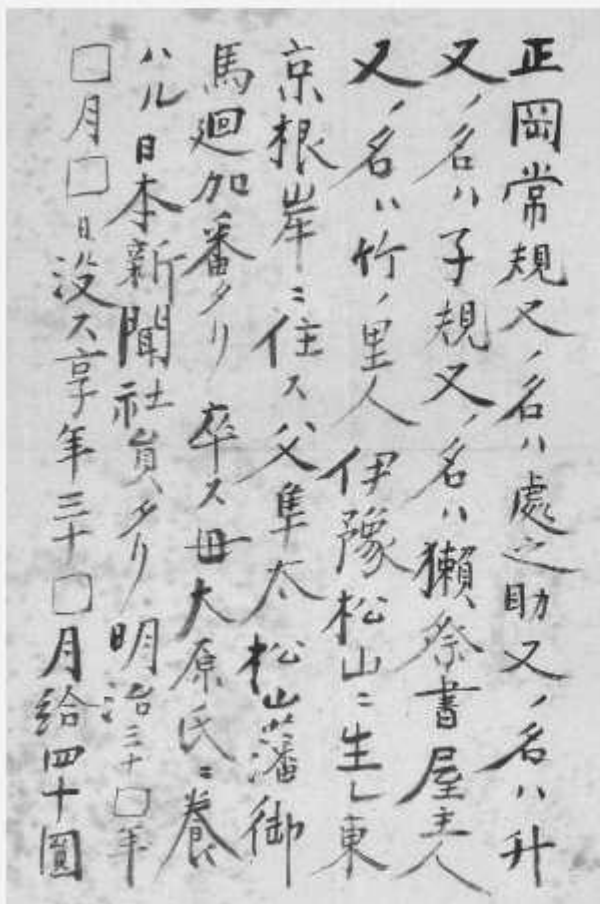
## 「仰臥漫録」(複製)を見てみよう



▲「仰臥漫録」(明治34年9月8日)

展示室で  
チェック！

## 「墓誌銘」を見てみよう



◀「墓誌銘」は、お墓にほるための文章です。亡くなった人について書かれています。子規は31才の時、友人に「僕が死んだら立派なお墓も墓誌銘もいらない。でも、お墓に字をほるのなら、このようにしてほしい」と手紙を書き、この墓誌銘をいっしょに送りました。

### 墓誌銘に書いてあること

ここには、自分の本名「正岡常規」、子どもの時使っていた名前の「<sup>にのすけ</sup>延之助」「<sup>のぶ</sup>升」、ペンネーム「子規」「<sup>いづみ</sup>籾祭書屋主人」「<sup>たけのさとびと</sup>竹ノ里人」を書き、続けて松山で生まれて東京の根岸に住んでいること、父親の<sup>はつた</sup>半太が松山藩の御馬廻加番（殿さまを警護する仕事）であったこと、母は大原氏の出であること、日本新聞社で仕事をしていることを書いています。さらに享年（自分が亡くなる年）を書き、最後にこの時1か月に40円の給料をもらっていたことを書いています。

子規は自分が亡くなる年「三十□」才と書いています。病気のために、自分が40才まで生きられないと感じていたのでしょうか。